

令和8年度 第1回丹波市総合教育会議 会議録（要約）

日時：令和8年7月23日（木）午前9時15分～午前10時15分

場所：山南支所3階 大会議室

出席者

市長	林 時彦
副市長	細見 正敏
教育長	片山 則昭
教育長職務代理者	吉竹 主税
教育委員	中川 卯衣
教育委員	渕上 智帆
総務部長	足立 勲
福祉部長	高見 英孝
福祉部こども福祉課長	上野 奈美
福祉部こども福祉課家庭児童相談係長	堀内 勲
教育部長	山本 浩史
教育部学校教育課長	小森 真一
教育部学校教育課スクールソーシャルワーカー	
	足立 幸広
教育部教育総務課長	足立 安司
教育部教育総務課副課長兼企画総務係長	前田 大志
総務部総務課長	谷口 守
総務部総務課副課長兼総務係長	船越 正一
総務部総務課主査	上畑 直哉

傍聴者 2名

1 開会
足立部長

2 市長挨拶
林市長 挨拶

3 協議事項

「学校だけでは解決できない、子どもを取り巻く課題について」

(1) 概要説明

○足立スクールソーシャルワーカー

- ・スクールソーシャルワーカーとは、文部科学省のスクールソーシャルワーカー活用事業により、2008 年から配置が始まっており、学校教育法施行規則に、位置付けられている。
- ・その役割は、「スクールソーシャルワーカーは学校、家庭、関係機関等との連携を機動的に図り、課題を各関係者と共有しながら、子どもを取り巻く環境等を改善する。本人の課題に対処する力を高めていくシステムづくりを行う専門家とされている。」とされており、福祉に従事するという観点で、学校だけで解決できないような課題について解決していくような役割を果たすことになっている。
- ・現在、市内 6 中学校及びその管内の小学校を対象に、週に 1 日 2 名のスクールソーシャルワーカーが分担して勤務し、対応している。
- ・資料を元に、事例 1 から 3 について、説明

(2) 意見交換

○林市長

- ・いずれの事例も大変な事例だなと感じたが、学校だけではどうしようもない事案も、福祉などの部門と連携して、何とか救われてるので、丹波市としては、少し安心しました。
- ・先生は人をよく見ておられるので、元先生という立場であって、今の社会の新しい面をしっかりと見ることができるような人が、スクールソーシャルワーカーでおられるのは大変ありがたいし、今の難しい事例も、経過をずっと追いかけていくのも大変難しいことだが、子どもを何とか救ってほしいと対応いただける存在であって欲しい。

○渕上委員

- ・事例の中で、家族の方にもたくさん介入され、手厚いことをされているが、そういう対応は、特例か。何か決まりがあって対応されているか。

○足立スクールソーシャルワーカー

- ・決まりはない。特殊ケースというわけではないが、組織的な関わりをしている事例であり、紹介させてもらった。

基準があったわけではなく、通常の学校の対応だけでは、解決出来ない場合で、こちらに相談があったときに、アプローチをし、考え、調べていく中で課題がわかってきて対応していく、ということをしている。

○中川委員

- ・子どもたちの気持ちは誰がすくい上げて、どう意思決定をしているのか。

○足立スクールソーシャルワーカー

- ・基本的には、学校の担任教師の方になるが、その方になかなか本当のことを言わないということもあり、全校配置でおられるスクールカウンセラーに聞いてもらうなど、子ども本人がどう感じているのかを知ることが、一番大事なところである。
- ・先ほどの事例でも、スクールカウンセラーが子どもが本当はどう感じているのかを聞き取ってくれて、その内容をスクールソーシャルワーカー等に共有してくれていることでも、スクールカウンセラーが全校配置になっている成果は大きいと思う。

○吉竹教育長職務代理者

- ・市長部局の福祉部こども福祉課の方で、学校から連絡があつて、子どもに関わるような相談事例や、対応事例があるのか。

○堀内こども育成課家庭児童相談係長

- ・学校から直接相談が入ることもあるが、スクールソーシャルワーカーを通じて、相談が入ってくることが多い。
相談は年間通じてずっと入ってきている状況
- ・学校との関係作りというのは、非常に重要だと思っており、年度当初には必ず全ての小中学校をスクールソーシャルワーカーの方と回らせていただいて、校長先生や支援員の方と、顔つなぎをさせていただき、気になるお子さんの話を聞かせていただくという取り組みも行っている。

○片山教育長

- ・潔癖症の子どもは特別支援学校で何人か出会ったことがあるが、それは子どもでしたので、事例の母親の場合は大人であり、本人は多分嫌がって病院に行っていないと思うが、治療の方法はあるのかと感じた。
- ・子どもの場合は、私が養護学校にいた頃も、もういいよって何時間もずっと付いてやってきた。この方もそのまま大人になっておられるかと思う

が、何か福祉関係の方に相談するなど、治療機関や治療方法がないものか。

○上野こども福祉課長

- ・ 去年からこども福祉課で「おひさま」が立ち上がったことで、母子保健係の保健師がアプローチをしているが、一筋縄では行かず、関係を作りながらタイミングを計っているような状況である。

○中川委員

- ・ 治療を行うことは必要と思う。
- ・ 人間関係の構築がまず大事で、1つずつ、手放していく納得感を得てもらえるようなコミュニケーションを取っていき、気の長い治療と関係性を結んでいく必要があることから、薬で治らないこともあり、このような強迫に関する精神科の専門の先生は、ほとんどおられない。

○片山教育長

- ・ 人間関係づくりの中で、両親や友人など信頼関係があり、その方の言うことなら聞いてくれるのは誰かということを探しながら、学校に来られない子の両親に対して、話をしてもらうのに誰が適任かと探っていくということを行っていた。

○足立スクールソーシャルワーカー

- ・ 親の治療や通院について、学校が関与することではない。
- ・ 福祉の部門でも、市民の方に対して、上から強制的に対応させることは出来ないが、一方で学校は繋いだらあとはやってくれると思ってる状態がある。
- ・ このような状態からも、親に対するアプローチはなかなか難しい。
- ・ しかし、「おひさま」ができた効果は大きく、一通りの体制が整っており、保健師や家庭相談員などが、いろいろな方法でアプローチができるので、本件のような医療に繋がらない事例の場合には特に効果的と感じている。

○片山教育長

- ・ 家族にとっても、学校にとっても心強いと思う。
- ・ 教育長会議で、いろいろな立場の教育長と話をしていたら、割と教育委員会と福祉部の仲が悪いところがあるという話を聞く。丹波市では、よくやっていたっていて、ありがたいと思っている。

○林市長

- ・スクールソーシャルワーカーの取組について、丹波市では何とかうまく機能しているようで、ありがたいと思っている。
- ・学校の先生というのは、子どもにとってはものすごく信頼があり、先生がちゃんと子どもの心配なこと大変なことはちゃんと見ているよ、というような声かけによって、その子どもにとって、精神的にすごい癒されると思うので、先生も、教育的に子どもたちを支援する仕組みのなかで先生がみんなの精神的な支柱になってあげて欲しい思う。

○吉竹教育長職務代理者

- ・昔は、担任の先生一人で全て対応していたが、今は、1つの事例にスクールソーシャルワーカー、カウンセラーの先生や、いろんな部署が関わってもらえるような時代になったということを感じた。
- ・最終的には子どもが安心して、穏やかに学習したり生活したりする場所をどう確保していくかというアプローチを、医療の面であったり、福祉の面であったり、また学校も当然関わっていかないといけないという部分があると思うので、定期的にコミュニケーションが取れる連絡会を、もってはどうか。
- ・また、子どもについて、学校が気づく度合いというのは、とても大事だと思う。日常生活で、この子どもはちょっとあれだな。というようなことを、気付ける場合と気付けない場合で随分と違ってくる。
学校の方でも、気を付けていただき、また研修を積んでいただけるとありがたい。

○山本教育部長

- ・吉竹委員の発言にもあったが、学校で発見できることは、多くあり、なぜそんなことが起こってるのかという背景をとらえることはすごく大事で、そこにどうアプローチしていくかという中で、福祉等との連携は、すごく大きいと感じている。
- ・丹波市では、元先生で、福祉とつながりを持つことができる人がスクールソーシャルワーカーでおられるのは、福祉部からしても、話を聞かせてもらい、学校に入りやすいというメリットがあり、学校からしても福祉士に伝えていただきやすいというような利点があるので、現状、うまく機能していると感じている。

○片山教育長

- ・仕組みとして、教育と福祉で定期的に情報交換会をやるなど、今後もできればいいのであれば、両方で考えて、意見を言っていたらありがたい。

○中川委員

- ・今後の引継ぎのためにも、足立先生が対応してこられた、うまくいった事例も、うまくいかなかった事例も、どういう人が関わって、どうなったかとかいう記録は、全部まとめられていて、しかるべき立場の人なら、いつでも閲覧できるみたいな状況にあるのか。

○足立スクールソーシャルワーカー

- ・対応等の記録はとってあるが、誰でも見られる状態になく、厳しいセキュリティで管理してあるが、スクールソーシャルワーカー同士では共有は可能である。
- ・もう1つ問題が、対応記録の残し方で、ケース会議の記録はこうで、日頃の記録はこうとか、そういうものが確立した記録方法はなく、体系化して残していくことが、中々出来ていない状況である。
- ・それは大事なことなので、カルテのようにして、記録は蓄積として、スクールソーシャルワーカーで共有して引き継いでいくことはしていきたい。

○吉竹教育長職務代理者

- ・例えばスクールソーシャルワーカーを3名にして、色々な事例に関わっていただいて、そのノウハウをまた次の後任の方に引き継いでいくことで、退職されてまた新しい人となったときに仕事のつながりが出来ず、色々記録の問題とかあるので、そういう経験の引継ぎのことも考えながら、体制についても検討されてはどうか。

○足立スクールソーシャルワーカー

- ・丹波市でスクールソーシャルワーカーの位置付けが、この5、6年の間にある程度固まってきていて、評価が学校現場の中には定着してきていると感じている。
- ・そのため、スクールソーシャルワーカーが新しい人になっても、つながりなどがゼロになるわけではないと感じているが、つながりや引き継ぎなど、これまでの実績をどうしていくかは、今後、考えていかないといけない。

○片山教育長

- ・引継ぎの部分で、障がいがある子の場合はサポートファイルが作成されていて、それをずっと低学年からつないでいく。それに類似した、共有用の資料等があれば、役に立つのではないかな。
- ・教員も個別の支援計画があれば、学校に行っておらず、学習の状況がどの程度進んでるのか分からない子どもが、いきなりサポートルームへ行ったとしても、状況が全く分からないことは無くなると思う。
- ・今後、個別の支援計画を見る必要のある子供もこれから出てくるのではないかなと思う。
- ・また、スクールソーシャルワーカーを続けていかれる中で、何かつないでいく必要があることがあれば、ご助言いただきたい。

4 その他 なし

5 閉会
足立部長